

獨逸。パンジー(三色堇)の栽培

重岡義雄

一 獨逸パンジーの來歴

筆者が昭和十年頃、北海道大学附属農場に勤務していたとき、当時の前川徳次郎博士が獨逸のデッペ会社やブルーメンシュミット会社から多数の花弁種子を輸入したが、主として試作栽培に當つたのが私でありました。輸入花卉のうちには多くの優良品種が発見されましたが、そのうちでもデッペ会社から入つたパンジーは従来わが国で栽培されていたものに比較すると、格段の相異があつた。すなわち、これらは完全な色分で、花型が大きく、しかも色彩が非常に鮮明であつて、当時国内で売出されてきたパンジーなどは足許へも寄れないくらいでありました。

当時のデッペ会社のカタログを見ればわかるように、その中にはパンジーの品種や系統が五十余种に及び、それらがすべて個々の特徴を明確に現わしているのですから、全く驚くよりはかほありません。なるほど噂にきくように、獨逸のパンジーはさすがに世界一だと感心したのでした。

これらの獨逸パンジーがあつた世界大戦中も故前川徳次郎博士や現在の明道博助教授

の温い手のもので大切に保存されていたことは、本當に仕合わせだつたと思ひます。

左に掲げる三種類のパンジーは今なお残つていて、北大の花壇や植物園の花壇、学芸大学岩見沢分校の花壇等に咲き誇つています。これらの花は輸入した當時のものに比べると花型が幾分小さくなり、また三者の一部混交などにあつて品質が少しは落ちたうらみがありますが、やはり氏は争われなもので、依然として春花壇の王者たる貫録を十分に示しています。

1 Viola tricolor maxima hellblau (鮮明な空色)

2 Viola tricolor maxima Feenkönigin, hellblau mit weißen Rand (碧青色で花卉の縁が白い)

3 Viola tricolor maxima aurea pura, reingelb (純黄色)

二 栽培法

パンジーの種子は採種したものを翌年播くと発芽歩合が悪くなるので、その年に採つた種子を播くようにいたします。

播種期は七月上旬から八月上旬の間であつて、それよりおくれ播くと、株張りが

不十分ならちに寒さがくるので翌春の成績がよくありません。床土は腐熟堆肥に畑土を混じて作つておくとよい。

播種期が丁度盛夏の候にかかると、立枯病などにおかされる心配があるので、床土を殺菌する(ウスプルンによる殺菌は操作が簡単である)とよい。播くのはもちろん冷床であります。播く前に床土を平にして、条間を二・三寸くらいにして条播いたします。覆土したら如露でよく灌水して、莖葉で覆をしておく。発芽後は莖葉覆をできるだけ取除いて、苗を丈夫に育てるよう心がける。ただし、日射の強裂な日中などは莖葉覆をかけて幼苗を保護いたします。

移植 播種後約四週間経つてから第一回移植をする。(条間、株間各々三寸くらい)移植後は十分に灌水して数日間莖葉覆をしておきます。活着した頃を見計つて莖葉覆を徐々に取つて、苗を日光に当て、徒長を防ぐ。第二回目の移植は第一回移植後三・四週後に行う。(条間、株間各五寸位)こうして育てた苗は十月中旬頃に花壇に定植いたします。パンジーは耐寒性の強い花卉ですから、そのまま外において翌春植えてもよい。耐寒性の強いことは驚くばかりで、北海道の根釧地方でも靱殻等で覆うてやると結構越冬しています。

三 簡易な栽培法

これは一度パンジーを作るとその後は特に種子をまかなくても、自然に落ちた種子が生えてきて、それで苗が作れるので、筆

者は通常この栽培法によつています。これを私自身簡易栽培法と言つて人々に勧めたい。次第で、具体的に申上げますと、パンジーを作つた春花壇は六月下旬頃には軽く耕して夏花壇用の花卉を植えます。すると自然にこぼれたパンジーの種子は発芽して秋までにはよい苗になります。このとき夏花壇用の花卉は余り繁り過ぎる花は良くないが、例えばフロックス・ドラモンドーぐらの繁りかげんの花であれば結構です。私の経験ではサルビヤ等のようによく繁るものの中では、よいパンジー苗はできません。こうしてできた苗をあらかじめ肥料を与えて準備しておいた床へ移植して大切に育て、翌春早く花壇へ植込むようにいたします。(筆者は北海道学藝大學・教授)

新 賣 發

北海道大学植物園主任

石田文三郎先生指導

バラの完全配合

乾燥肥料

一袋(一升) 一〇〇圓

本肥料は魚粕、油粕、骨粉、米糠を原料に堆積醱酵せしめて製造したもので、バラその他草花、野菜に最も有効且つ安全な肥料です。御試用願います。